

令和2年度 P T A本部役員

令和2年度P T A総会において、下記のP T A本部役員が承認されました。

会 長：福島正明

副会長：持丸信彰 綿貫まり子 石引礼穂 川村始子（校長）

監 事：岩田裕稔 大貫 一永 大貫勝彦

書 記：岩崎知子 成川 隆介 新木圭彦



本年度P T A会長を務めさせていただきます福島と申します。会員の皆様におかれましては日頃よりP T A活動へのご協力に感謝申し上げます。

さて本年は本校創立120周年の記念すべき節目の年であるとともに、新設附属中学校には40名の新生を迎え併設型中高一貫校としての歩みをはじめました。伝統を見つめ直し、次代に向けた有為な人材育成のための新たな仕組みの中でリスタートする希望に満ちた改革元年であると言えます。

しかしながら、そんな最中に突然襲いかかった百年に一度と言われる疫病の流行という事態に世界中が振り回されております。このような状況下での長期間にわたる自粛生活は未だに社会経済全体に大きなマイナスの影響を与え続けており、前代未聞の休校措置はその後再開された学校生活においても生徒の皆さんの内面に様々な不安をもたらしていることでしょう。

疫病の拡がりや未然に食い止められなかった原因の一つに「どうせたいしたことにはならないだろう」といった人々の心理が働いたという見方があるそうです。これまでの日常生活に馴れすぎて目の前に起っていることが異常事態だと感じるができない、いわゆる「正常性バイアス」というものが働いたということです。

生きていく上で様々なことを経験することは大切なことで私たち親も子供に多くの経験を積みせようとしています。そして経験豊富な人は、経験の少ない人よりは多くの対処法を知っています。しかし、疫病にしても災害にしても誰も経験したことがないことが頻繁に起こる時代になった今、やり過ごすことができないようなこれまでに経験のない事態にどのように対処するのか、生徒たちの学校生活にも私たちの社会生活にもそういった学びの場が必要なのかも知れません。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉があります。本校の強みは120年という積み重ねた歴史のなかに多くの学びがあることと言えるでしょう。

これまでの日常生活が否応なく制限されるこのような時期だからこそ、あまり悲観的にならずに、少し心と時間の余裕を持つ努力をしつつ、目の前の出来事を様々な切り口で観てその多面性を認めながら、疫病禍だからできること、を見つけていくことが肝要と考えます。

P T A活動も年当初の計画通りには進んでいませんが、今何が生徒たちのためになるか、を経験則にとらわれず柔軟に考えていく1年にしたいと思っておりますので、皆様のご理解ご協力をお願いいたします。